

第5回わかやま環境大賞表彰式

1 表彰制度の目的

環境の保全に関する実践活動が他の模範となる個人又は団体を表彰し、その活動事例を広く県民に紹介することにより、県民の環境保全に関する自主的な取り組みを促進することを目的としています。

2 表彰式の日時及び場所

- (1) 日 時 平成18年6月9日(金) 13時30分～14時00分
- (2) 場 所 和歌山県民文化会館 小ホール
- (3) その他 表彰式終了後、環境月間記念講演会を開催
14時10分～15時40分
講師：森 拓也 氏
(すさみ町立エビとカニの水族館館長)
演題：「動物から学ぶ地球環境」

3 受賞者

31件の応募の中から「わかやま環境賞選考委員会」による選考を経て知事が決定

(1) わかやま環境大賞

紀州大地の会

(2) わかやま環境賞

宇久井半島を愛する会

桃山ハートキットサングループ

資源リサイクルセンター (株)松田商店

竜門東生活学校

和歌山県立海南高等学校

海南市立巽中学校

(3) わかやま環境賞特別賞

田辺市立三栖小学校

橋本市立紀見小学校

【 わかやま環境賞選考委員会名簿 】

役 職	氏 名	備 考
和歌山大学助教授	宮 川 智 子	会 長
和歌山県生活学校連絡協議会長	宇 尾 たみ子	
和歌山県立紀伊コスモス養護学校長	宮 本 孝 子	
NPO 和歌山有機認証協会事務局長	重 栖 隆	
和歌山県環境生活部長	楠 本 隆	

「 わかやま環境大賞 」 候補者の選考について

平成18年の「わかやま環境大賞」に県内各地で環境保全活動をされている個人や団体、事業者、学校といった様々な分野の方々から応募がありました。

応募のあった活動については、美化活動、教育・啓発活動、環境保全に役立つ技術の開発といった多様な内容のものでした。

これらの活動は、どれも環境保全上有益なものと認められるものですが、本表彰制度の目的が、「環境の保全に関する実践活動が他の模範となる個人又は団体を表彰し、その

活動事例を広く県民に紹介することにより、県民の環境保全に関する自主的な取り組みを促進すること」から、①活動が多様な立場の人々の参加を得た広がりを持つものであること、②活動が継続的なものであること、③活動に特色があること、④環境保全への効果が現れていることを基準に判断し、次のとおり選定しました。

この表彰を契機として、環境保全活動の環が、県民の皆様方に広がっていくことを願っています。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 わかやま環境大賞 | 紀州大地の会 |
| 2 わかやま環境賞 | 宇久井半島を愛する会 |
| | 桃山ハートキトサングループ |
| | 資源リサイクルセンター (株)松田商店 |
| | 竜門東生活学校 |
| | 和歌山県立海南高等学校 |
| | 海南市立巽中学校 |
| 3 わかやま環境賞特別賞 | 田辺市立三栖小学校 |

わかやま環境大賞

(1) 受賞者

紀州大地の会

(2) 評価

地域社会の中で、EM（有用微生物群）を総合活用し、より健康的な食物づくりを通して生産－流通－啓発活動を実践し、有機農業の普及に寄与している。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

園 井 信 雅

イ 活動事例の名称

安全で有用な微生物群の積極的活用

ウ 活動の契機

EM（有用微生物群）技術との出会い。「食の安全」「環境問題」への関心の高まりから。

エ 活動内容

より健康的で環境負荷の少ない有機農畜産業技法の研究、及び普及の拡大。

地域での生ゴミ類の簡易堆肥化、水質浄化活動等の環境浄化活動の技術協力。

学校・婦人団体等への環境教育支援。

わかやま環境賞

(1) 受賞者

宇久井半島を愛する会

(2) 評 価

豊かな自然と人のふれあいの場としての「ふるさとづくり」に、地域（行政・団体・学校等）が一体となった取組みが継続している。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

亀 井 憲

イ 活動事例の名称

宇久井半島の美化・緑化・保護活動

ウ 活動の契機

観光開発会社の開発行為が頓挫し、荒れ地となった現状を、区民が昔の自然に取り戻そうと会を結成した。

エ 活動内容

平成9年から活動。会員数57名。

宇久井半島周辺の美化清掃活動を主とし、不法投棄ゴミ、漂着ゴミの回収。花壇づくり、シイノトモシビダケの保護活動等。

環境省・文部科学省の子供パークレンジャー事業への協力。

地元小中学校に植樹等の指導、体験学習を実施。

わかやま環境賞

(1) 受賞者

桃山ハートキトサングループ

(2) 評 価

安全でおいしい農産物の農法に取り組み、その活動が実践・勉強会等で多くの
拡がりを得ている。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

酒 井 悦 子

イ 活動事例の名称

循環型環境・農業の取り組み

ウ 活動の契機

桃の栽培において、キトサン（カニなどの甲殻類の甲羅等に含まれる成分）を使用し、農薬と化学肥料を減らして有機配合肥料のみを使用した
ら「せんこう病」が少なくなったことや農業を見つめ直す機会があった
ことから。

エ 活動内容

農業に微生物やキトサンを使用し、有機配合肥料を用いた免疫力を高める
農法に取り組み、安心・安全・おいしい農作物を消費者に提供している。
また、米ぬかぼかし等の実践を取り入れた勉強会を開催し、活動の輪を
広めている。

わかやま環境賞

(1) 受賞者

資源リサイクルセンター (株)松田商店

(2) 評 価

長年にわたり、環境関連施設として小学生の見学を受け入れてきたが、新たな情報発信としての工場のテーマパーク化は環境教育の推進により期待ができる。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

代表取締役 松田 美代子

イ 活動事例の名称

リサイクル工場のテーマパーク化を実現し、未来を担う子供たちへの環境教育の充実を図る

ウ 活動の契機

10年ほど前から環境教育・社会貢献の一環として小学生を中心としたリサイクル工程の見学を受け入れてきた。説明の中で退屈する子供もいたことから、教育と娯楽を融合した、工場をテーマパーク化する計画を立ち上げた。

エ 活動内容

遊びの中で環境について深く学べるアトラクション形式の工場見学案内。
ペットボトルからのエコ商品へのリサイクル。
環境絵本の出版。
和歌山大学と協同でデザイン・製造したダストボックスの開発。
HPによる環境教育の発信。

わかやま環境賞

(1) 受賞者

竜門東生活学校

(2) 評 価

発足時から身近な環境問題、地域生活の課題に取り組み、実践活動を広めた。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

辻 岡 秋 子 (つじおか ときこ)

イ 活動事例の名称

リサイクル活動を広げ、あしもとから取り組む地球温暖化防止

ウ 活動の契機

地域の清掃活動や空き缶のリサイクル活動、生活学校大会の研修で、環境問題の取組みを身近な所から広げる必要性を感じるようになった。

エ 活動内容

空き缶のリサイクル活動。
生ゴミのEM菌による堆肥づくり活動。
地域の花いっぱい運動。
小学校へ環境問題の出前学習。

わかやま環境賞

(1) 受賞者

和歌山県立海南高等学校

(2) 評 価

伝統として引き継がれた環境教育と、地域の環境学習の拠点としての新しい環境教育の実践が活動の幅を広げた。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

校長 上 田 公 一

イ 活動事例の名称

環境教育とその実践について

ウ 活動の契機

36年間継続している臨海実習をはじめ、長年調査・研究を実施してきたが、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールの指定を機に、地域の環境学習の拠点を目指す教育に取り組むようになった。

エ 活動内容

36年継続中の臨海実習等の自然環境学習。
海岸クリーン作戦、環境保全調査・研究。
生徒による地域の小中学生への自然科学の学習授業。

わかやま環境賞

(1) 受賞者

海南市立巽中学校

(2) 評 価

2年生全員が亀池の生物調査を通じ環境問題に取り組んだ活動や、長年にわたる地域の美化活動は、今後も引き継がれることが期待できる。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

校長 道 下 雄 三

イ 活動事例の名称

亀池周辺の環境調査・環境保全

ウ 活動の契機

校区の自然（亀池）を総合学習の中で調べてみようと思ったことから。

エ 活動内容

亀池自然公園や周辺の生物調査を通じ、環境問題を研究。

10年以上にわたり地域のゴミ拾いや空き缶のリサイクル。

わかやま環境賞特別賞

(1) 受賞者

田辺市立三栖小学校

(2) 評 価

中学・高校・大学と連携しながら生物調査や水質調査を行うことで、「三栖」に対する親しみと理解を深めた。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

校長 湯 川 啓 司

イ 活動事例の名称

地域学習から環境学習へ

－ 『もっと知りたい、見つけたい、私たちの川（三栖川）』

ウ 活動の契機

MTP（マスターティーチャープログラム）研究協力校並びにシティサクセスファンド教育実践校となり、小中高大学合同で水質調査プロジェクトに携わったことから。

エ 活動内容

地元中高等学校と連携し、三栖川の水質調査。
水生生物や蛍の生態調査等。

わかやま環境賞特別賞

(1) 受賞者

橋本市立紀見小学校

(2) 評 価

地域美化活動を社会福祉活動に繋げ、地域と一体となった活動を継続して行っている。

(3) 受賞者の概要

ア 代表者

校長 宮 井 利 明

イ 活動事例の名称

アルミ缶を集めて車椅子を贈ろう

ウ 活動の契機

平成12年、当時の6年生が「総合的な学習の時間」の中で車椅子を借りて体験学習を行い、その後「今、私たちに出来ること」の実践に取り組んだ際に、車椅子の寄贈に取り組んだことから。

エ 活動内容

地域の人たち、施設と一体となってアルミ缶を回収し、社会福祉協議会・病院等へ車椅子を寄贈している。